

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

試してみよう！～ポップコーン～／社会福祉法人遊亀会 いけだ保育園（長崎県）

子どもたちは、園内で栽培活動をしていますか？子どもたちの興味・関心を大切にしたい植栽選びをしていますか？

今回は、子どもたちのつぶやきを受け止め、発見・疑問を見逃さずに、栽培からクッキングの活動に活かしている園の実践です。

トウモロコシでポップコーンができることを知った子どもたち。失敗しても、みんなで考え合って目的を達成する過程に「科学する心」の育ちを把握することができます。また、“地域の方や家庭との繋がり”が、子どもたちの活動を支えていることが見えてきます。



自分たちでポップコーンを作ろう／5歳児

- 園の畑では、毎年子どもたちが11種類以上の野菜・穀物を育てている。そこに、今年新たにイエローポップを植えることになった。きっかけは、「ポップコーンって、本当はトウモロコシ？」という子どもたちのつぶやきからだった。クッキング活動で見たポップコーンの粒がトウモロコシに見えたことから、‘自分たちにも育てられないかな’という思いが、子どもたちの中に巡った。
- 8月上旬、収穫したイエローポップで、第1回目のポップコーンを試してみることにした。固くなった粒を取り、フライパンに油を入れて熱する。
- 熱した粒は黒く焦げてしまった。失敗したことから、子どもたちは、イエローポップについて詳しく調べ始める。すると、水分を抜いておかなければポップコーンができないことを知る。



✦ 膨らまないポップコーン

- 8月中旬に収穫した全てのイエローポップを、水分を取るために日当たりよく雨に濡れない室内に粒を取らずにみんなで干した。一週間後に5歳児の子どもたちは、粒を取った。
- 早速、ポップコーン作りを始めると、目を輝かせて見つめている子どもたち。ポツポツとした音は鳴るが、ほとんどの粒が弾けない。

Aちゃん：「何で膨らまないのかな」

保育者：「水がまだ残っていたのかな？」

Aちゃん：「そうかも知れないね」

Bちゃん：「でも、少しポップコーンになってるね」

Cちゃん：「まだ、乾かさないといけなかったね」



- 結局、最後までポップコーンは膨らまずにがっかりしたが、「まだまだ、乾燥したらできるのではないか？」という期待は生まれた。

✦ 地域の人との繋がり

- 失敗の連続から、本当にポップコーン作りは成功するのかと不安になり、どうすれば膨らむのか子どもたちと保育者は一緒に悩んでいた。そこで、ポップコーン作りに関わる情報を収集するため、小学校・畑がある地域の方・果樹センター・お茶屋など、地域の人に話を聞くことにした。

● 小学校（理科の教師）

ポップコーンが弾ける仕組みについて聞くことができた。子どもたちにも分かりやすい言葉で教えてもらう。

● 畑を持つ、地域の方

粒の状態にして乾燥させた方が、より水分が早く抜けていくということを教えてもらう。

● 果樹センター

乾燥機があるので、イエローポップの乾燥を援助することができるので、教えてもらう。

● お茶屋

乾燥機はないが、ポップコーンについての話を聞いた。昔は孫たちが遊びに来た時のために、イエローポップを粒の状態に軒下に置き、保存していた。水分を抜くため、長い間置いておいたとのこと。また、ネズミなどに食べられないよう袋に入れ、乾燥剤を入れていたことを教えてもらう。

✦ 「ちゃんと膨らんだ！」

- 子どもたちと残りの粒を取って、乾かし方について話し合った。

保育者：「どうやったら早く乾くかな」

Dちゃん：「扇風機で風を当てれば？」

Eちゃん：「暑い所に、おいたらどうかな」

- ドライヤーや扇風機で風を送ったり、袋に入れた粒と一緒に乾燥剤を入れたり、ざるに粒を入れて天日干しにしたりと、粒の様子を見ながらその都度、子どもたちと話し合い、粒の水分を抜くことに力を入れていった。子どもたちは、どうしたら膨らむのか考えながら、意欲的に活動に関わっていた。

- ドライヤーに扇風機に乾燥剤。試行錯誤しながら乾かしていったイエローポップの粒。「もう大丈夫だろう」ということで、9月上旬ポップコーン作りにも再チャレンジすることにした。

- フライパンに油と粒を流し込み、蓋をする。「膨らんで欲しい」「本当に膨らむのかな」「きっと大丈夫」と、様々な気持ちが入り交じりながらも、じっと息をのんで様子を見守った。その時、「ポンッ」と音が鳴った。

Aちゃん：「わぁ！膨らんだ！」

- 1つ目のポップコーンは、しっかりと膨らんでいた。安心したのか、子どもたちから「ふう…」という息がもれる。喜んでいながら残りの粒も次々に膨らんでいく。

Fちゃん：「やったやったー！」

Aちゃん：「できたね！」

Dちゃん：「ちゃんと膨らんだ！」

Gちゃん：「今度は、成功したね」

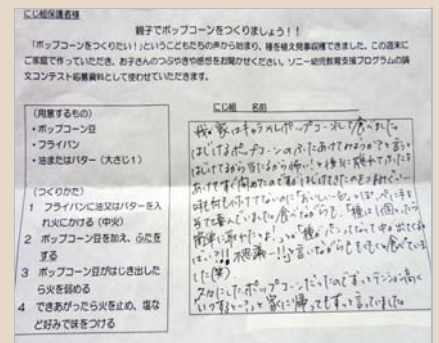


- 子どもたちは飛び跳ねながら喜んだ。フライパンいっぱい大きく膨らんだポップコーンに、驚きと感動が高まった。
- 成功したポップコーンを、年下の子どもたちにもおすそ分けすることになった。
- また、お世話になった地域の人にも、「成功しました」という報告も兼ねて、お礼にポップコーンを配ってまわった。

✿ 家庭との繋がり

ポップコーン作りが成功したことで、「持って帰りたいな」と、家族と一緒にポップコーン作りを試したいという子どもが現れた。そこで、5歳児の家庭にイエローポップの粒とレシピを渡したところ、後日感想を持ってきてくれた。

我が家はキャラメルポップコーンにして食べました。弾けるポップコーンの蓋を開けてみようか？と言うと、弾けるから当たるから怖い！と後ろに隠れて、蓋を開けてすぐ閉めたのですが、弾けてきたのをつまみぐい…味も何も付けてないのに「おいしー」とほっぺに手を当てて喜んでいました。食べながらも「種は1個とったら簡単に取れたとよ！」とか「種がパンってなって中が出てくるとばい?! 不思議ー?!」と言いながら黙々と食べていました(笑) 徐々にしたポップコーンだったので、ずっとテンション高く「いつするー?」と家に帰ってもずっとと言っていました。(S児の母より)



画像クリックで拡大

✿ 考察

ポップコーン作りを通して、子どもたちは“不思議”から生まれた「なぜ」「どうして」などの疑問に何度も出会い、「どうなるだろう」と心を弾ませながら試していた。それは必ずしも成功ばかりではなく、失敗も経験した。しかし、“残念”という気持ちを共感し合いながら、みんなで“一緒に考えていこう”とする姿勢が育まれていった。子どもたち同士で始まったやり取りでは、一緒に観察したり試したりしていくうちに、保育者に発見を伝えたり、分からないことを尋ねたりすることが増えていった。信頼する保育者だからこそ、力を借りて解決しようとする方向に展開していったと考える。また、失敗を経験したからこそ、「○○だから失敗したのか」「○○すれば良かったのか」という学びにも繋がった。さらに保護者や地域の方々の関わりが、大きく関係している。自分たちと一緒に考えたり喜んだり、援助してくれたりする人の存在は、子どもたちの取り組みの大きな支えとなっていた。このような様々な経験を経て、子どもたちの「科学する心」は育まれていったと考える。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」